

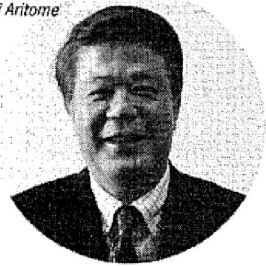
Close up TOKYO

Interview

株式会社ゆりかもめ
代表取締役社長

有留武司

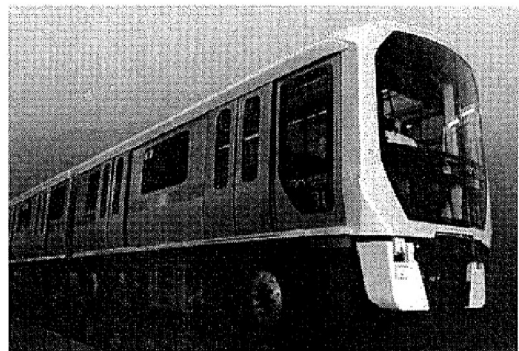
talk by Takeshi Aritome



ありとめ たけし 1950年東京生まれ。74年に早稲田大学卒業後、東京部入部。港湾局開発調整課長、福祉局障害福祉部部長、生活文化局総務部長、環境局長など経て、2012年より現職。

(※) Meeting (企業などの会議)、Incentive travel (研修旅行)、Convention (国際機関などが行う会議)、Exhibition (イベントや展示会) の総称。

下・試運転を経て、2014年1月から順次置き換えられる新型車両7300系。安全性、快適性のみならず、前面ガラスを大型化し、眺望も向上した(提供・株式会社ゆりかもめ)



新型車両が登場。 めげずは、乗って、見て、降りて 楽しい「ゆりかもめ」。

— 新交通「ゆりかもめ」(以下ゆりかもめ)に、新型車両が導入されます。

有留 ゆりかもめは、都心と臨海副都心をつなぐ公共交通機関として、平成七(一九九五)年に開業しました。全二十六編成(二編成は六両の固定編成)のうち、初期に導入した十八編成百八両(7000系)を、間もなく新型車両(7300系)に交換します。

— 新型車両の改良点は?

有留 大きく分けて三点あります。一つ目に「混雑の緩和」です。座席をすべてロングシートにして車内スペースを広げるとともに、車体に軽量素材を用いることで、最大乗車人員を約八百人に増加できます(現約七百人)。

二つ目に「快適性・利便性の向上」

です。セミハイバックシートの採用で横揺れに強く、乗り心地が向上します。これまでなかった荷棚を設置し、空調性能も向上させました。これまでの一枚扉から、二枚扉の「両開きドア」にすることで、乗り降りがスムーズになります。

三つ目に「省エネ・リサイクル性の向上」です。軽量でリサイクル性が高いアルミニウム車体の採用で、廃棄時の環境対策も考えられています。LED照明も採用しました。

— ここ最近、サービス向上などにも積極的に取り組まれている背景は?

有留 開業以来、ゆりかもめはお客さまに関わる死者を出さずような事故がゼロです。今後も安全運行に全力を注

ぐいっぼう、「ユニバーサルデザイン」とサービス向上の推進にも努めていきます。

全十六駅の全ホームドアに、段差をなくすステップを取り付けたり、世界で初めて、温水洗浄便座を、全駅の全洋式トイレに導入しました。

また、臨海副都心の玄関口・新橋駅には、デジタル・サイネージを設置しました。放映型・検査型ディスプレイで、沿線の観光情報をお伝えします。各駅で四カ国語対応のタブレット端末による案内システムを導入したり、運輸関係社員の英会話研修を実施することで、増加する外国人対応も充実させます。

おかげさまで、平成二十四年度は輸送人員が三千八百万人を超えました。

— いっぼう、お台場など一部商業施設の集客力が低下傾向にあるようです。ゆりかもめの果たす役割とは。

有留 お客さまの中には、お台場に「東京のリゾート」を求めて来られる方も多いでしょう。美しい眺望を活かして、ゆりかもめに「乗る楽しみ」を増進する必要性を感じています。

今後も定期旅客が二割、観光客などの定期外旅客が八割という現状は、中長期的に続く見込まれます。平成十七年度に豊洲新市場が開場し、観光客向けの「千客万来」施設が併設されたら、さらに観光客の増加が見込まれます。東京都は臨海副都心のMICE(※)・国際観光拠点化を推進しています。したがって、今後、耐用年数を迎える残りの八編成に関しては、実態を検証して、眺望・デザインを重視した「観光対応型車両」を検討したい。同じ路線に、通勤型・観光型と多様な車両が走っている、面白いと思います。

— 平成二十七年に開業二十周年を迎えるにあたり、その展望は?

有留 「二十歳のゆりかもめに向けて成長から成熟へ」をコンセプトに多彩なイベントを考えています。ワインや夜景を楽しむ「イベントトレイン」や、7000系の廃車を活用したイベントも考案中です。今後も「ゆりかもめ」の魅力と発信力を強化することで、臨海副都心のブランドアップにも貢献します。